東通原子力発電所広報誌

より、そう、ちから。
東北電力

しおさい

石持残照刈田風景

CONTENTS

●特集記事 シリーズ㉘ ふるさと見聞録：一里小屋（いちりごや）を訪ねて……2
●明日へのかけはし：東通村産業保健連絡協議会（さんぽ連）……4
●クローズアップ こんにちは元気さん：小川（おがわ）　清吉（せいきち）さん……4
●ファイト!わんぱく：東通小陸上クラブ……5
●地元の特派員レポート：河村（かわむら）　優生（ゆうせい）君／大福（だいふく）　大陽（ともはる）さん……6

東通村イメージキャラクター
かんだちくん

vol.31
2024年12月発行

特集記事 東通村29の集落の特徴的風物や人物を探る！

シリーズ㉘ ふるさと見聞録

入植した、2代目・3代目が和気あいあいと生活

一里小屋（いちりごや）を訪ねて

のどかで静かな場所に、あったかい人々が暮らす地域

1945年（昭和20年）、むつ市田名部をはじめ、東通村内や津軽地域などから、開墾のために入植した14戸で作られた集落が一里小屋地区です。北は東通村石蕨平、南はむつ市大室平に隣接しています。

一里塚の石碑

一里小屋地区の名前の由来は、2つあると言われています。1つは、むつ市奥内地区から一里小屋地区の入り口である一里塚まで一里あったことからという説。もう1つは、国道279号線の田名部大橋から一里の場所に一里塚があり、その辺りに家が建っていたことからという説です。

入植当初の集落は、東通村下田屋とむつ市を結ぶ国道338号沿いにありましたが、農地が手狭となり、3.5kmほど離れた現在の平坦な丘陵地に移りました。

基幹産業は、かつては農業と畜産でした。農業は主に水田で、畑では菜種の生産なども行われていました。今は、水田のほとんどが休耕田ですが、最近は東通そばが作られています。

畜産は乳牛で、最初は2軒で始めましたが、多い時には8軒ほどの家で育てられていました。現在も、1軒で乳牛が育てられています。

地区の中央には「一里小屋稲荷神社」があり、地区の全世帯が神社の氏子です。現在の社は1992年（平成4年）に落成し、祀っているのは農業の神様である「稲荷様」と「熊野様（権現様）」。稲荷様の大祭は9月10日で、近年は直近の日曜日に行われています。熊野様は、東通村下田代から譲り受けられたと伝えられており、年末に「年取り」と称して、昔は獅子を持って地区内を練り歩く門打ちが行われていました。

能舞はありませんが、入植当初は手踊りや神楽も行われていました。

小学校は当初、一里小屋地区から歩いて数分の「むつ市立開拓小中学校」に通っていましたが、1963年（昭和38年）に「田屋小学校石上分校」が開校しました。1965年（昭和40年）には、石上集会所に「農繁期季節保育所」が開設されています。

一里小屋婦人ホーム

地区の活動は、年に3回、地区の集会所である「一里小屋婦人ホーム」に集まって、神社の祭り、新嘗祭、年越し行事などについて話し合いが行われます。

今でも、年に一度は、青森市のりんご園や弘前市の温泉などに、日帰りのバス旅行が行われています。一里小屋は、年代の近い人たちが暮らし、地区の活動も活発な、とても仲が良い地域です。

バス旅行で訪れたりんご園

一里小屋稲荷神社

稲荷様

熊野様

一里小屋地区

一里小屋のため池

一里小屋地区には、神社の近くに大きなため池があります。「一里小屋のため池」と呼ばれていますが、水利権はむつ市大曲地区にあり、水田の用水として使われてきました。

60年ほど前までは、フナ、カジカ、カワガニが生息し、子どもたちは池で泳いだり、魚を捕まえて遊んでいました。

1968年（昭和43年）の十勝沖地震では、池が決壊し、津波と見間違えるほど、集落に水が押し寄せたそうです。

一里小屋地区 会長　福島（ふくしま）　敏（さとし）さん（71歳）

一里小屋地区は、世帯数9戸、人口26人。農業で生計を立てる人はほとんどいなくなりましたが、今は入植した家の2代目、3代目が入植当初とほぼ同じ人数で穏やかに暮らしています。車の音も聞こえない、静かでのどかな地域で、みんな仲良く過ごしています。

入植した初代はすでに他界し、集落の歴史を示す資料が全く残されていないので、今後、開墾の歴史を後世に残すためにも、調べてみたいと思っています。

地区の継続は最も重要と考え、3代目を通じて「土地は無料で提供するから、一里小屋に住みませんか」と、村内外の若い人へ移住を呼びかけています。

明日へのかけはし

東通村の頑張るグループを紹介

働く人々と村民の健康増進をはかろう！
[東通村産業保健連絡協議会(さんぽ連)]

10月に開催されたリレーマラソンでの集合写真

東通村内の企業をはじめ、行政、住民が一体となり、地域の健康増進をはかろうと活動しているのが、「東通村産業保健連絡協議会」、通称“さんぽ連”です。会長は、東通村診療所の川原田恒所長が務めています。

結成のきっかけは、川原田所長が産業医として各企業を訪ねたとき、従業員の運動不足や地域とのコミュニケーション不足が目立つと感じたことから、「働く人々の健康づくり」を目標に、一企業だけでは解決できない健康課題をみんなで一緒に考え実践していこうと、村と東通村診療所が発起人となり、2023年に結成されました。現在11社が加盟し、年間8つのイベントに延べ600人が参加しました。

春はひとみの里周辺を歩く健康ウォーキング、夏はフットサル大会、秋はリレーマラソン、冬はドッヂボールとフリスビーを掛け合わせた「ドッヂビー」など、働く人と村民が一緒になって爽やかな汗を流しています。

運営は、各企業の持ち回りで、スポーツの他にも、禁煙活動の推進や健康講話なども行っています。

川原田所長は「今後も、健康維持に必要なスポーツはもちろん、心身の健康を目指して文化的イベントも開催していきたい。スポーツ・文化・芸術分野で指導してくれる人を募集しています!」と今後の積極的な活動に向け、意気込みを話されました。

指導者を希望する方は、以下にお問い合わせください。

[問い合わせ先]
東通村診療所 古川俊之さん
(TEL0175-28-5111)

健康ウォーキング

フットサル大会

リレーマラソン

ドッヂビー大会

村内で元気に活動する人を紹介!

クローズアップ

こんにちは元気さん

マコモダケを栽培し、普及活動を行う

元気さん **小川 清吉さん(73歳)**

マコモダケを村の特産品にしようと栽培している小川清吉さんにお話を伺いました。

東通村蒲野沢地区の休耕田でマコモダケを栽培している、小川清吉さん。同地区に生まれ、県外で会社員として勤めた後、15年前にUターン。65歳から農業を始め、これまでにエゴマ、藍、落花生、ピーカンナッツ、バナナなど、ユニークな作物を育ててきました。

「蒲野沢の湿地帯で、休耕田に適したものを何か植えたいと考えたとき、マコモダケを見つけたんです」と小川さん。マコモダケは、イネ科の多年草「マコモ」の茎に黒穂菌がついて大きく膨らんだもの。アクやクセがなく、タケノコのようなシャキシャキとした食感が特徴で、2反歩(約20アール)の田んぼに300株を作付けしています。

「毎年5月に株を植え、夏に草取り、糠と鶏糞の肥料を与え、無農薬で育成。秋に白い髭が伸びると収穫期のサインで、10月末から11月中旬に根本から30cmの茎の部分を刈り取ります。天ぷら、佃煮、サラダにするとおいしいですよ」と説明。村内のプチマートや、野牛川レストハウスで「9のつく日」に販売しています。

マコモダケを村内で生産しているのは、小川さんただひとり。「もっともっとマコモダケのことを知ってもらい、普及させたい」と、一株農園主を募って収穫体験も開催しています。

元気の秘訣は「マコモダケを作っておいしいと言ってもらうこと。自分自身の明日への活力につながっています」とにっこり。

「マコモダケは、低カロリーで、腸内環境を整える食物繊維が豊富。ミネラルもたっぷり。もっともっと広めて、耕作放棄地を減らし、沿道をマコモダケでいっぱいにしたい」と語っていました。

作付けされたマコモダケ畑

収穫の様子

東通小陸上クラブ

小学校の部活動廃止に伴い、2023年からスポーツ少年団として活動が始まった「東通小陸上クラブ」（大槻淳育成会会長）。現在のメンバーは、男子15人、女子19人の合計34人。みんな明るく元気でパワフルな子どもたちです。

練習は毎週火曜日、木曜日の午後4時から5時半まで、土曜日は午前9時から11時まで、東通小学校グラウンドで行っています。今年度の「むつ下北地区小学生陸上競技大会」では、6年女子100m1位、5年女子100m1位、共通女子200m1位、男子ジャベリックボール1位と好成績をおさめており、下北地区の大会はもちろん、県大会でも決勝進出するなど、力をつけてきています。

元教員で「日本陸連公認コーチ4」の資格を持ち国際大会レベルのコーチングも行える八戸秀男総監督をはじめ、齋藤貴春監督、中村駿輔コーチ、氣仙歩コーチが、ボランティアで指導を行っています。

東通小陸上クラブのみなさん

練習は、正しい姿勢でまっすぐ走るための基本ドリル、ジャンプ力を鍛えるハードルのほか、短距離、長距離、リレーとそれぞれの種目に取り組みます。また、ストレッチには、ロサンゼルス・ドジャースの大谷翔平選手も行っている「メディシンボール」を使った体幹トレーニングも導入しています。

「練習や競技を長く続けるために、基本は“楽しく”がモットーです。練習すると確実に記録が伸びるのが陸上競技。記録が伸びれば、子どもたちは喜びます。日々記録への挑戦です」と八戸総監督。

男子キャプテンで小学6年生の齋藤颯介くんは「クラブ活動は、部活と違って新鮮で楽しい。みんなで団結してさらに上を目指したい」。女子キャプテンで6年生の大槻碧さんは「リレーの練習は大変だけど、中学生になっても続けて、大会で入賞したいです」と話します。

毎月「アスリート新聞」を発行し、技術のみならずメンタル面でもサポートしている八戸総監督は、「スポーツクラブにとって大事なのは、子どもたちを継続して見守れる指導者。現在、中村コーチが指導者の資格取得に取り組んでいます。本格的な競技場と同等レベルである日本一の東通小学校グラウンドで、日本一の選手が育つよう力を尽くしたい」と話していました。

準備体操

メディシンボール

基本ドリル

ハードルを使いジャンプ力を鍛える練習

種目別で練習

村内各地区の皆さまから心温まる情報をお届けします。

地元の特派員レポート

写真は特派員が
自ら撮影したものです。

にぎやかな ひとみの里

東通村砂子又在住
東通小学校(6年) 河村（かわむら） 優生（ゆうせい）君(11歳)

僕の住んでいる砂子又のひとみの里は、東通小学校が近くにあり、目の形をしているのが特徴の地区です。

夏には毎年「東通ドン！とボン・盆フェスタ」が開催されます。僕は祭りが大好きなので、毎年早飲み競争やコスプレ盆踊りに参加しています。早飲み競争では二年連続で一位を取り、花火や東通牛をもらえてうれしかったです。コスプレ盆踊りは、今年から「東通そろたら音頭」になったので、踊りを知っている人に教えてもらい、たくさん練習しました。残念ながら賞は取れなくて悔しかったけど、去年よりも人がたくさんいて楽しかったです！

踊りに集中している時は歌詞を気にしていなかったけど、ちゃんと聴いてみるととても良い歌詞なので、ぜひ皆さんも聴いてみて下さい！

早飲み競争の賞品を持って

今年のコスプレ盆踊り

石持と私

東通村石持在住 大福（だいふく） 大陽（ともはる）さん(37歳)

私の名字は大福です。縁起がいいねとよく言われる自慢の名字です。

そんな大福が生まれ育った石持は、県道むつ尻屋崎線(県道6号)に沿い、むつ市より北西約10km、海岸線より約2km地点に位置する約70世帯の集落です。地域の特色を活かし、農業、漁業、畜産業等の一次産業にも携わっています。

集落東側には袰崎（ほろさき）神社があり、境内に石神様を祀る御堂があります。石神様は、元々は牛を伏せたような大きな岩だったそうですが、災害等により砕けて現在の姿となりました。石持の石神様は女神といわれ、その岩の表面から小石が生まれ出るという説話から「子どもを授かる石」として信仰を集めています。

袰崎神社

石神様

釣り人が多く集まる石持漁港周辺には、下北ジオパークのひとつ、「北部海岸」があります。津軽海峡に面して東西約8kmの大地層が観察できる場所です。ここでは高さ20mの地層が見られ、地層の上側は約12万年前、下側は約40万年前のもので、縄文土器や化石が発掘されており、大地の歴史が広がります。

また、北部海岸の砂浜にはさまざまな貝殻や色鮮やかなシーグラスがあり、子どもたちと宝探し気分で散歩をしています。

私は、この石持で多くの方々に優しく見守られ育ちました。そして今、私の子どもたちも温かく見守られながら育っています。そんな温かい石持や東通村に住む人たちを守っていきたいという想いを胸に、消防職員として地域に恩返しをしていきたいです。

北部海岸

発行

東北電力(株)東通原子力発電所広報課
〒039-4293 青森県下北郡東通村大字白糠字前坂下34番4
TEL0175-46-2225・FAX0175-46-2227

しおさい、PSつうしんのバックナンバーはこちら

当発電所へのご意見・ご要望をお寄せください

誌名「しおさい」について
★東通村で絶えることなく聞こえる心地よい波の音(しおさい)のように、皆さまの心に末長く心地よく響き続ける広報誌でありたいという思いを込めています。

編集後記

しおさい第31号、いかがでしたでしょうか?

「こんにちは元気さん」で小川さんよりご紹介いただいた「マコモダケ」。恥ずかしながら、今回取材するまで名前を聞いたこともありませんでした。

そこで、さっそく購入して食べてみました!「まずは、素材の味を」と思い、今回は素焼きで食べてみましたが、クセになる食感と優しい甘さが印象的でした。今後は、いろいろなおいしい食べ方を研究したいと思います!(ちなみに、私の職場では、てんぷらがオススメ!という声が多かったです)

東通村の新たな“推し”のマコモダケ、まだ食べたことのない方は、ぜひお召しあがりください!今回のしおさいが、マコモダケの認知度向上の一助となれば、編集者として大変うれしく思います。

今後も、東通村の皆さまに親しんでいただける誌面づくりに努めてまいりますので、引き続きご愛読のほどよろしくお願いいたします。